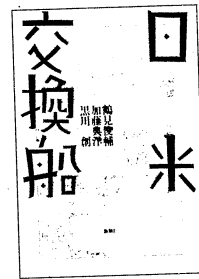


# 目の前のことに全力投入

4月に入ってから突然、コロナサートがなくなり、自宅で生徒さんに教えることもできなくなりました。2か月ぐらいい、すべてがストップ。でも、私には書く仕事があるので、収入がゼロではない。恵まれていると思います。

私は一人で活動しています。ソリストと言えは聞かえはいいのですが、実態はフリーランス。もともと定収入も



鶴見俊輔、加藤典洋、黒川創  
「日米交換船」(2006年)  
新潮社

太平洋戦争開戦と同時期に在米日本人として突然自由を奪った。翌1942年、日本人が船に乗り祖国へ乗った。その時のいきなり船内の状況が、まさに「イホーム」なんです。実業家から留学生や怪商人まで、年齢も立場も違う1500人が、れた空間で、単調な、

## 船上のステイホ

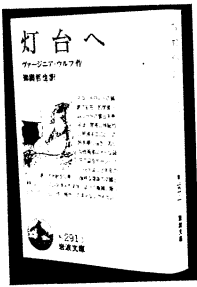
な感じ。私もこの職業だ時から特に気負い。「明日はどうなるかわからない」と思ってた。だから新型コロナが出ても、個人的には全くの損という感じではない。とはいえ、こんな自分を巻き環境が激変することはあったにありま。こんなことは以前にありだろつかと考えていて、思い出したのが、評論見俊輔さん(1922-1955)の体験を聞き「日米交換船」です。

## 文庫×世界文学 4 名著 60 愛の記憶

『灯台へ』  
ヴァージニア・ウルフ著  
死別とは理不尽なものである。故人となったその人は、記憶の中にいつまでもその姿をとどめ、笑い、語らる。そのぬくもりも、たしかに覚えている。しかし手を伸ばしても、そこにはない。言えなかったことを

伝えるすべは、もうない。

40代なかばに差し掛かるうとしていたヴァージニア・ウルフが『灯台へ』を構想しはじめたとき、根底にあったのはそのような感覚だっただろう。ウルフは13歳のとき母を、15歳のとき異父姉を、22歳のとき父を、24歳のとき兄を失った。その後イギリスは第1次世界



\*御興哲也訳(岩波文庫)

## 喪失感とノスタルジー

大戦に突犠牲者になった友。個人的な戦後。喪失感を書いた3部構成のうち、第2とあるラムジードのスカムズは羽しみにし。冒頭から白い葉真



『動物記』小池光著  
寺歌には多種多様な動物が詠まれそれぞれの生態やエピソードをユコ綴りながら、言葉の描く情景とともに鑑賞する。情緒の漂う篇。身近な猫やスズメ、架空の存在量など、見開きで読み切れる105ヒイはどれも味わい深く、新鮮なうっている。(朝日文庫、740円)

『ヒトごろし』京極夏彦著  
斬られた女から美しく噴きあがる血を見た少年・土方歳三の内奥に、人を殺したいという抑えがたい「欲動」が生じた。やがて刀を持ち、罰せられることなく人を殺し続けるために彼は新選組を動かしていく。とことんダークで鋼のように冷たい心を宿した男が、幕末の闇のなかでおそろしく魅力的に閃く。(新潮文庫、上下各1100円)

## 文庫新書 評・川口晴美(詩人)

『こころと身体の心理学』山口真美著  
金縛りや明晰夢など、さまざまな感覚のあり方を脳の機能と心理学をふまえて科学的に解説。思春期の心と身体的不安定さに寄り添い、理想のボディイメージの変遷やネット空間での自己意識の拡張についても考える。コロナ禍の今、他者との身体的なつながりの意味を問い直す上でも示唆に富む内容だ。(岩波ジュニア新書、880円)



\* 三作を尾を